
第 63 回 お殿様は松江城のどこに住んでいたのか？

〔はじめに〕

『松江市史』編纂のため松江城を調査するなかで、これまでに伝わってきた事柄にも疑問点が浮かんでくることがあります。以前に「市史編纂コラム」でも松江城天守の初期の姿について取り上げましたが、今回は松江城のどこにお殿様が暮らしていたのか、という題で考えてみたいと思います。

〔これまでの通説について〕

松江城のお殿様が住んでいた場所について、「殿様が住んでいるのは御殿でしょう。」と答えが返ってくるのではないかと思います。松江城にも三之丸に松江藩主の暮らしていた御殿がありました。また、堀尾氏・京極氏の時代には二之丸御殿（現在の興雲閣・松江神社付近）に住み、松平氏二代綱隆まで藩主は二之丸に暮らしていたのだ、という話をよく聞かれるのではないかと思います。さて、この話について二つの疑問点があります。一つ目は、堀尾氏の一族で堀尾吉晴の従弟にあたる堀尾但馬が作成したという「堀尾古記」に見える記述です。「堀尾古記」寛永 6 年（1629）の条に「一御屋敷御作事、二月廿三日御作事初、閏二月十六日ニ鉦始」とあります（『新修島根県史史料編近世上』）。

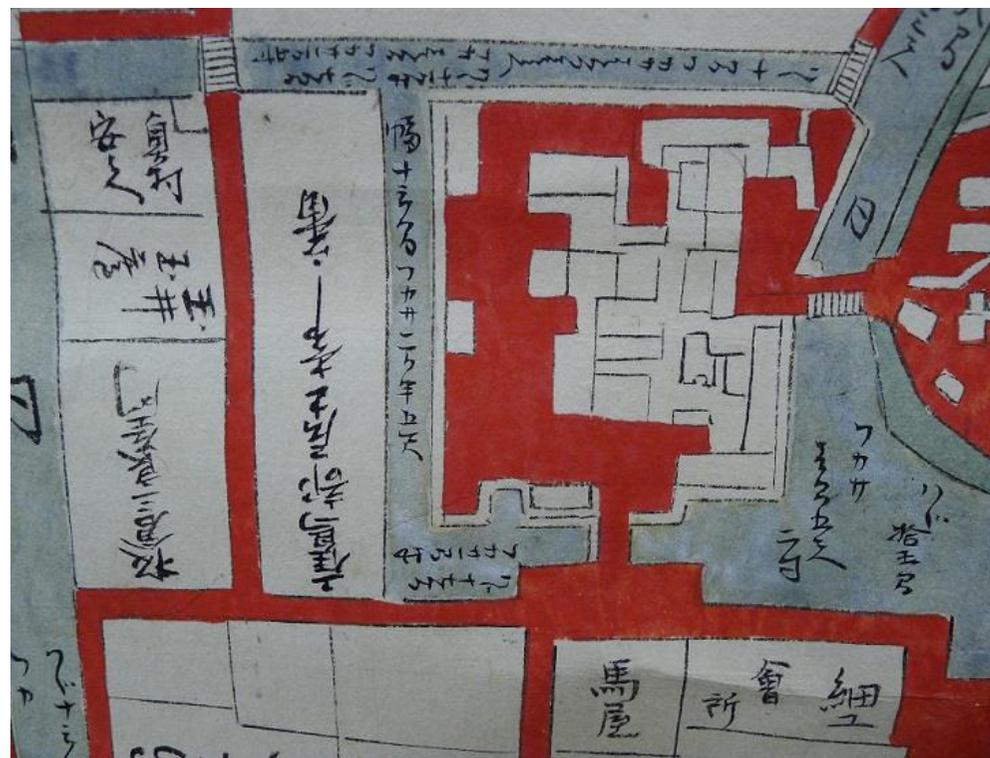
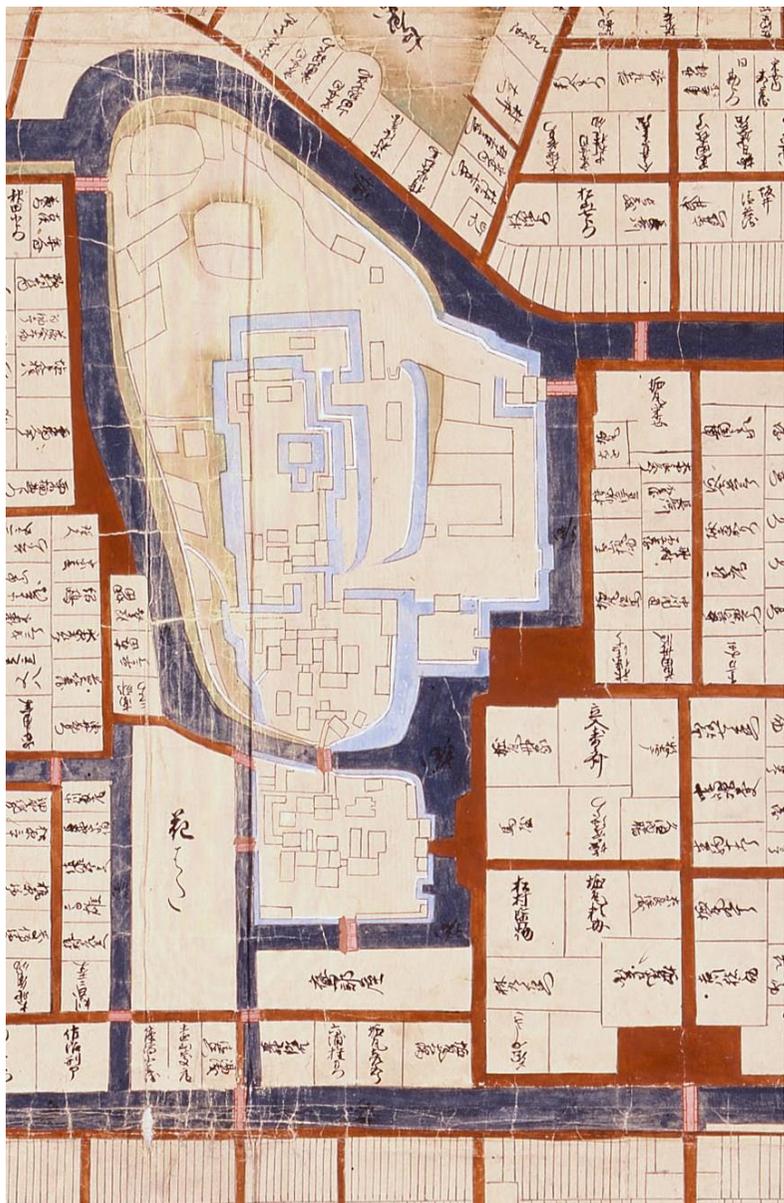
この記事には「御屋敷」の「御作事」が寛永 6 年 2 月 23 日から始まり、閏 2 月 16 日に鉦始を行ったとあります。この時の建物には「御」と敬称がついているので堀尾但馬にとって上位の存在に関わるものと思われ、藩主である堀尾忠晴に関わる建物であることが想定されます。

しかし、この記事だけでは松江城の事を指すのか、江戸など他の地域の建物を指すのか分かりません。

ここで二番目の疑問点を見ることにしましょう。

二番目の疑問点は、島根大学附属図書館に所蔵される「堀尾期松江城下町絵図」です。この絵図と現在の松江城下を重ねてみると、驚くほど城下町の基本プランの変更がなく、現在まで踏襲されていることが指摘されています。この時三之丸はできあがっており、寛永年間の絵図には三之丸から二之丸に上がる御廊下橋を思わせる橋も描かれています。

「堀尾期松江城下町絵図」（島根大学附属図書館所蔵）



「寛永年間松江城家敷町之図」三之丸周辺部

このことにより、堀尾忠晴の時代には三之丸まで作られていたのではないかと、という疑問点がでてきました。

次に、松江城についてこれまでどのように記述されていたのか、見てみたいと思います。

〔松江城の御殿に関する記述〕

実は松江城築城については、築城当時の記録がほとんど残されていないことが分かっています。(佐々木・福井、2016)

そこで、松江城の藩主の居所について述べた文献を取り上げてみます。

事例 1 : 『増補松江城物語』(島田成矩著、1999年、初版1985年)

「つぎに本丸の御殿であるが、これは非常時のことを考えれば、本丸が最も安全であるから、築城時には、ここに御殿ができたのである。しかし、それはあくまでも非常時のもの、臨時のものである。本居は二ノ丸の御殿であった。二ノ丸には堀尾・京極・松平二代までが住み、三代の綱近からは三ノ丸の御殿に移ったのである。」(増補版 156～157頁)

次に、二之丸の記述について見てみましょう。

「十八世紀に入ると、二ノ丸は大きな変化が生じた。元禄期から三ノ丸の建造物が整備されたのである。『御作事御役人帳』によれば、御寝間・奥御姫様御殿・三ノ丸御門・御内所部屋そして新御屋鋪などの普請が行われた。三代の綱近は二ノ丸から三ノ丸に移り、晩年は眼疾により、さらに出丸(北ノ丸)に新御殿を建てて、ここで眼病の養生をした。」(増補版 167頁)

さらに三之丸の記述について次のようにあります。

「御殿は元禄期に整備され、三代綱近からこの三ノ丸が藩政の中心となった。」(増補版 175p)

このように島田氏の研究では、三代綱近から三之丸に居を移したとされ、それまでは二之丸にお殿様が住んでいたとされます。

事例 2 : 『松江城』(河井忠親、1967年)

「二ノ丸は本丸の南下に連なり上段と下段にわかれている。本丸から降りた上段二ノ丸のほぼ中央に大書院があり、松平家二代の藩主綱隆の時まで、ここが藩主の住居になっていた。」(51頁)

河井氏は、松平綱隆まで二之丸にお殿様が暮らしていたと述べています。

事例 3 : 『松江市誌』(松江市、1941年)

「城地の中で本丸には天守閣以下諸櫓あり。二ノ丸、三ノ丸には藩主の邸宅」(42頁)

「二ノ丸は松平氏二代綱隆の時代まで藩公の居住したところで、其の西半には御書院と月見櫓があり、一段高く御広間東半を成していた。」(1502頁)

昭和 16 年（1941）成立の『松江市誌』では、二代綱隆まで二之丸に居住していたと記しています。
最後に、明治 40 年（1907）に編纂された『島根県史要』を見たいと思います。

事例 4：『島根県史要』（藤本充安編、1907 年）

「二の丸は、一の門外枳形より、二の門三の門塀重門を経て、西門内の奥すき部屋に至るまで総括する称にして西門内に九十三坪余の広間、及び六十六坪の書院、並に、十四坪の月見楼あり。二世綱隆此處に住せしが、後に軍用方武具方の衙を此内に置くことなりむ」

事例 1～事例 4 までの文献を見ると、『島根県史要』の記事から二之丸に藩主の居所が置かれたとする記事が見られることが分かります。また、二代藩主綱隆まで二之丸が藩主の居所とされ、三之丸に藩主が住むようになったことを述べたのは、島田氏の著書であることが分かってまいりました。

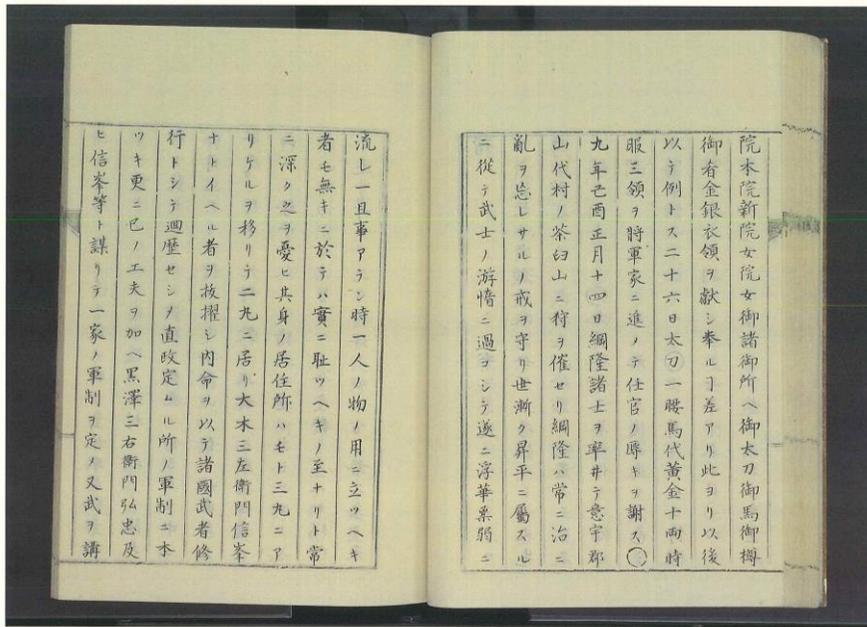
それでは次に、江戸時代の記録では藩主の居所はどのように記されていたのか見てみましょう。

〔江戸時代の記録に見えるお殿様の居所〕

ここでは、江戸時代の記録でお殿様がどこに住んでいたのか変遷を追いたいと思います。実は、堀尾期・京極期とも、お殿様が松江城で暮らしていることが記されていても、どこに住んでいたのかが分かるような史料は見つけることができませんでした。そこで松平直政から綱隆までの史料を検討してみることにしました。

松江藩松平家の公式な記録にあたる「家譜」では「家譜上」（直政～宣維）（島根県立図書館蔵）の寛文 9 年（1669）の条に次の記事が見えます。

「○九年丑酉正月十四日、綱隆諸士ヲ率イテ意宇郡山代村ノ茶臼山ニ狩ヲ催セリ。綱隆ハ常ニ治ニ乱ヲ忘レサルノ戒ヲ守リ、世漸ク昇平ニ属スルニ從テ、武士ノ遊情ニ過コシテ遂ニ浮華柔弱ニ流レ、一旦事アラン時一人ノ物ノ用ニ立ツヘキ者モ無キニ於テハ、実ニ恥ツヘキノ至ナリト、常ニ深ク之ヲ憂ヒ、其身ノ居住地ハモト三丸ニアリケルヲ移リテ二丸居リ（以下略）」（句読点は筆者が付した）



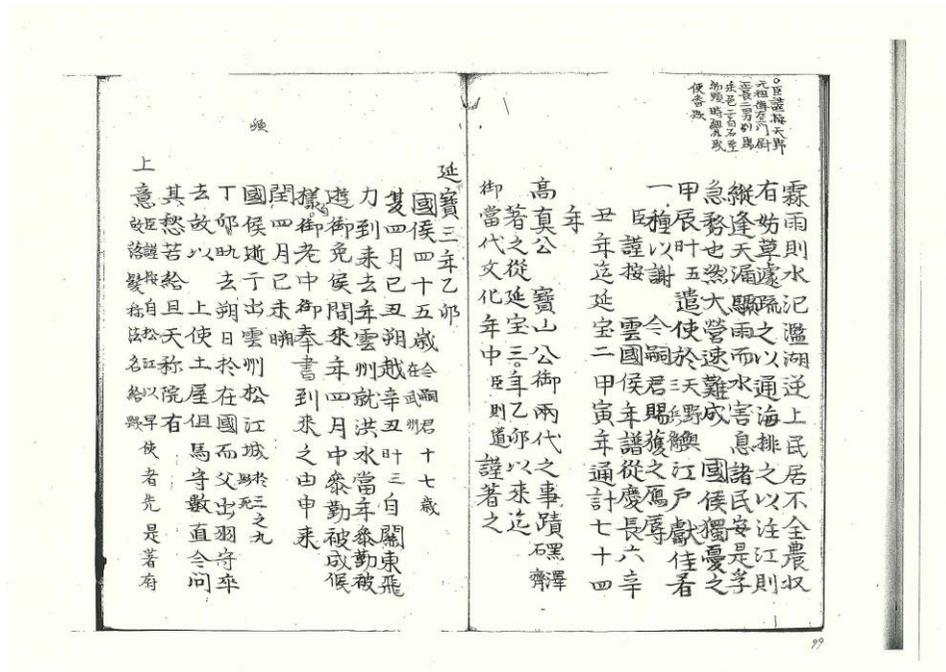
寛文 9 年に綱隆が茶臼山（山代町）で狩を催した記事に続き、綱隆自身が「常ニ治ニ乱ヲ忘レサルノ戒ヲ守」ることを目指し、浮華柔弱に流れることを憂い三之丸から二之丸に住居を移したと記事です。この他にこの記事を基にしたのか『雲陽秘事記』にも同様な話が載せてありました。この「家譜」の記事からみると、少なくとも直政の時代には三之丸に居住できる御殿などの施設が存在していたこととなります。

「家譜上」（直政～宣維）（島根県立図書館蔵）寛文 9 年条

また、延宝 2 年（1673）の大洪水では松江城三之丸の玄関まで水がきたとされています。さらに「雲国候年譜壺」の延宝 3 年の条には次のようにあります。

「国候逝去去于出雲州松江城於三之丸影死」

綱隆は松江城の三之丸で死去したとあります。この記事から、綱隆の時代に三之丸にも御殿機能があったということが考えられます。



「雲国候年譜巻」(島根県立図書館蔵) 延宝3年

[おわりに]

松江藩主の居所については、明治末期の『島根県史要』から、二代藩主綱隆までが二之丸を住居にしていたとする話が出てきたように見えます。その後、『松江城物語』でかなりエピソードが増補されたという過程が見えてきたと思います。

次に史料上からみると、堀尾忠晴の時代の松江城下を記した「堀尾期松江城下町絵図」では、「三之丸」に施設があるように見えます。また、「堀尾古記」の寛永6年条には「御屋敷」の作事が始まったとあります。そして、松平期の史料では綱隆の時代に居所を三之丸から二之丸に移したことや、綱隆が三之丸で没したという話も視られます。こうしてみると、すでに堀尾期には三之丸に御殿建築が作られ、藩主はその場所に住んでいたのでは、と考えられます。

この藩主の居所については平成29年度刊行予定の『松江市史』別編「松江城」でも詳しく述べられることでしょう。

【参考文献】

- ・ 和田嘉有「松江城郭施設の推移について」(『松江城研究2』松江市教育委員会、2013年)
- ・ 佐々木倫朗・福井将介「いわゆる「松江城築城物語」に関する再検討」(『松江市史研究7号』2017年)

(平成29年3月3日 / 史料編纂課：福井将介)